

天眼

旧東海道から仮想現実を思う

ながた かずひろ
永田 和宏

三條大橋を発つて、旧東海道を歩いて
いると本欄に書いたのは、もう3年も前
のことになる。2019年の節分の日に、
旧友田中啓一(東京都総合医学研究所理
事長)が日本橋から、私が三條大橋から
歩き始めた。

歩きは至極快調で、週末の空いている
日を見つけては、それぞれが勝手に歩い
ていた。ほぼ半年で東海道のちょうど中
間点、27宿目の袋井の宿まで行ったのだ
ったが、そこからが難航した。二人とも
ちよっと忙しくて中断していたら、この
コロナ禍である。延々と歩けない時期が
続き、ようやく去年の秋くらいから再開
と「う」ことになった。

一里塚ひとつひとつを辿り来て年の
初めに日本橋まで

一里とふ距離が私にわが脚になじみ
来たりてけふ日本橋

最近作った歌だ。1月9日、ようやく
日本橋に到達したのである。

予期せぬパンデミックの影響で、なん
と3年もかかったことになるが、それと
は別になんとかやり遂げたという、ちょ
っとした充実感と感慨がある。なんの役
にも立たない、ある意味愚行に属するも



のかもしれないが、自らへのかすかな自
信につながった気がする。

今回の旧東海道踏破で、いちばん印象
に残ったのは、先の歌にもあるように一
里塚の存在であったかもしれない。「一
里塚」などという言葉は、今や修辭的に
しか意味を持たないものである。広辭苑
的には「大きな仕事の達成度や区切りと
なる目印」といった意味で使われること
がほとんどで、現物の塚が話題になるこ
とはほとんどないだろう。

しかし、全長500キロ弱、1266里余
の旧東海道には、1里ごとに塚が築かれ
ていた。今も当時の姿のまま残されてい
るものも多くあり、土が盛られた立派な
塚の上に、松や榎などの樹が植えられて
いる。ただ「一里塚跡」の石碑だけが残
っているものも多かったが、1里ごとに
巡り合うそれらの塚は、歩いているもの
にとっては何よりの励みであり、慰め
でもあることを実感した。

一つ一つの一里塚に遭うのをひそかな
楽しみに歩き続け、いつの間にか、距離
を「ではなく」里」で実感している自分
に、あるいは自分の脚に気づくことにな
る。ああ、また1里を来た実感する。
それが2首目である。

かつて旅人は、このように自ら歩くこ
とによってしか、他の土地へ行くことは
かなわなかった。遅々とした歩みではあ
っても、そこには自らの脚で稼いだ距離
という、確たる実感と自信があったはず
である。逆に、自分の能力ではこれ以
上は無理だという、自らの「限界」とい
うものをも、誰もが実感として知ってい
たはずである。

東海道を歩き始めてから、新幹線で移

動するときの感覚が大きく変わった。窓
の外を眺めながら、あああのあたりを歩
いたなあと思いつくことはもちろんだ
が、それよりも、俺は本当にこれだけの
距離を歩いたのかと信じられない思いに
とられることが多い。

1日で東京を往復する生活。それをな
んの疑いもなく当然のように思ってきた
が、そこには自らの力というものはほと
んど「反映されていない」ことを思う。自ら
歩かなければ決して到達できなかったは
ずの距離が、自分の能力とはまったく関
係のない手段によって与えられている。
そんなことに気づくこともほとんどない
のが、現代の社会であろう。

コロナ禍で注目に注目されたW
eb会議やテレワーク。さらにはメタバ
ースなどの、いわゆる仮想現実(バーチ
ャル・リアリティ)がもうすぐそこま
で来ていることは確かである。だが、そ
れよりはるか以前から、自分の脚で歩か
なくなってきたこと、それ自体がすでに仮想
現実そのものだったのかもしれないと、
いま旧東海道を歩き通して、改めて感じ
ているのである。

(JIT生命誌研究館長、歌人)